

表 幕末維新期の福井藩人事関係資料（松平文庫）

番号	資料名	数量	判型	備考
917	剝札上・下 嘉永四	2冊	美濃	
921	士族1-7〔3欠、表紙貼紙ニ「十四冊之内」トアリ〕	6冊	半紙	
922	子弟輩1-3〔表紙貼紙ニ「十四冊之内」トアリ〕	3冊	半紙	
926	新番格以下1-7 御記録方	7冊	半紙	書役
923	新番格以下増補雜輩〔表紙貼紙ニ「十四冊之内」トアリ〕	1冊	半紙	
918	雜輩之類剝札 御記録方	1冊	半紙	書役
924	元陪臣乾・坤〔表紙貼紙ニ「十四冊之内」トアリ〕	2冊	半紙	
925	徳川家脱走御預人〔表紙貼紙ニ「十四冊之内」トアリ〕	1冊	半紙	
920	(士族略履歴)1-13 御記録方〔6欠〕	12冊	美濃	認方など
927	(諸役人并町在御扶持人姓名)御記録方〔表紙貼紙ニ「共十三冊」トアリ、7欠〕	12冊		
-1	御役人列集		半紙	
-2	御役人列集		半紙	
-3	御医師御鍼医御目医師御外科		美濃	認方など
-4	御茶道御絵師御儒者(中略)御鷹方御餌刺御鶴匠蘭学方英学方		美濃	認方など
-5	御徒目付御徒組頭		美濃	認方など
-6	御徒		美濃	
-8	御坊主記録		美濃	認方など
-9	御料理方御菓子方椀奉行		美濃	認方など
-10	減切		美濃	
-11	御本丸一ツ橋紀州田安京都江戸大坂天津柏崎(以下略)		半紙	
-12	御国町方		半紙	
-13	御国在方		半紙	

解説

幕末維新期の福井藩人事関係資料(松平文庫)について

吉田 健

はじめに

松平文庫には幕末維新期の福井藩士についての人事関係資料がまとまって残されています。目録番号九一七から九二七の一点四七冊(九一九「姓名録」一〇冊は天保期までを扱った資料なので除外)で、表のように三つのグループにまとめることができます。本編が主に対象とするのはこのうちの九一七「剝札」・九二一「士族」ですが、説明の都合上、他のグループの中心資料「新番格以下」と「(士族略履歴)」の説明から始めることにします。

一、卒身分の藩士の記録

九二六「新番格以下」は表紙には「新番格以下諸下代迄」とあるように、参考資料の資格別人数表の「与力」から「下代」、すなわち「諸組(足軽)」を除く「卒」身分の藩士の人事記録です。「卒」身分の藩士は一代限りの召抱えが原則で、家督相続は認められませんでしたが、実際は親の引退後、子供が新たに召抱えられることが多く、したがって家ごとに書き継ぎ管理することが可能でした。このため家ごと(同姓複数)の場合は扶持高順)に、いろは別で七分冊に構成されています。

さらに各冊子とも裏表紙に弘化四年(一八四七)十一月付で「書役」の名が記されています(写真1)。二人目の大橋佐四郎の肩書きは「石原甚十郎物書」とあり、三人目以降の肩書きにある横田、土屋、中根、浅井を含めてすべて当時の目付です。『福

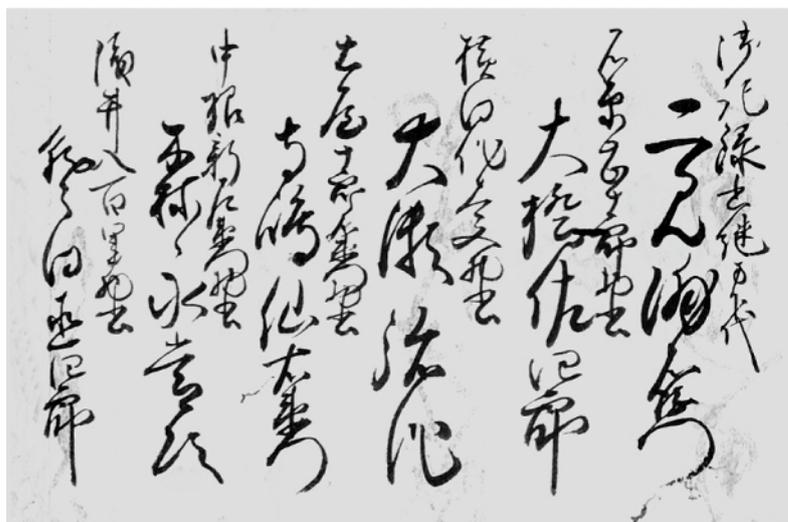


写真1「新番格以下」書役

松平文庫 福井県立図書館保管

井藩史事典』（鈴木準道著、舟沢茂樹校訂）によれば、「御目付役（六人）は執法官にて番士より人撰拜命、国政枢機に關し上は家老職より下は荒子あらしこに至るまで褒貶・黜陟を掌る」とあり、また「目付が部下として使用するに徒目付（中略）、此外に目付組（一組十人。此内に小頭・分役ぶんやく・物書等一名つつあり）あり。徒目付并小頭・分役・物書等は日々市街見廻り、大小によらず目撃したる事を目付へ報告、また内密調事に従事す」とあります。これらのことから「新番格以下」七冊は、弘化四年十一月「褒貶・黜陟」すなわち人事管理を掌る目付の職務上、その下で「内密調事」などに従事する「目付物書」が手分けして作成した、卒身分の藩士各家の先祖を含む人事記録であることがわかります。

なお写真一人目の二見浦右衛門について「新番格以下」は、目付浅井八百里組の物書であり「弘化四未九月十六日訳合も有之二付、諸下代之内江被召出」「同月十八日御目付御記録書継方下代被仰付候」と記録しています。また二見の後任の鷺田直四郎についても「弘化四未年十月十九日江戸詰之処、御呼返し浅井八百里物書役被仰付」と記録しています。このことからこの「新番格以下」の編さん作業は、本巻六一ページから明らかなように前年の七月九日に目付に就任した浅井が中心になり、各目付の書役を動員し約二か月間で仕上げた仕事であったことがわかります。「新番格以下」は、こうして完成された後も何人もの筆跡で明治五年（一八七二）頃まで書き継がれており、福井藩の「卒」身分の藩士の人事記録としては、唯一まとまった資料となっています。

二、士分の藩士と専門職の記録

九二〇「士族略履歴」は家格別人数表の「本多家」から「新番格」までの士分の藩士について、各家ごとにまとめられた歴代当主の人事記録で、いろは別に、禄高順に記載されています。各家ごとに丁が改められていて、書き継ぎにより行が詰まれば新たに紙を綴り足す形で管理されています。各家とも天保十一年頃までが同じ筆跡ですから、この頃に一応完成し、その後は何人もの

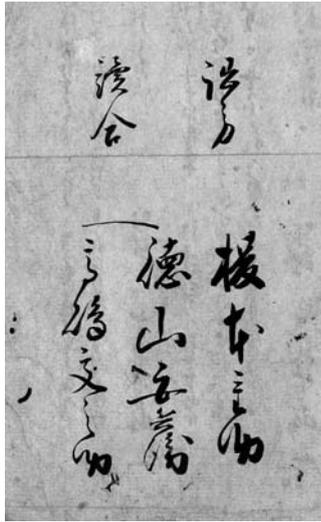


写真2「(士族略履歴)」認方など

松平文庫 福井県立図書館保管

筆跡で明治二年頃まで書き継がれています。各冊子とも裏表紙に「認方」と「読合」の名が記されています(写真2)。冊子により役割、顔ぶれが替わる場合がありますが、天保期に御奉行下代を勤めている者が確認できる程度で、これにより作成の主管を確定することはできません。

ところで、九二七「(諸役人并町在御扶持人姓名)」一三分冊のうち枝番三から一〇の七冊(七欠本)は「(士族略履歴)」と同じ体裁の美濃判で、うち五冊には同様に「認方」と「読合」の名が記されています。これらは「(士族略履歴)」と同時に作成され、また同じように書き継がれたもので、医師や絵師など専門職の藩士の履歴が収められています。家格別人数表に見るとおり、医師や絵師などの専門職も禄高により士分に格付けされる者もありますが、「(士族略履歴)」には記載されず、別に専門職として、医師や絵師などの職種ごとに、士分から卒までをまとめて記載、管理しています。じつは卒の人事記録である「新番格以下」にもこれら専門職は記載されていません。すなわち一般職は士分が「(士族略履歴)」、卒が「新番格以下」と分けて管理されたのに対して、専門職は職種ごとに、士分・卒がまとめて管理されていたのです。

ところで、これら一連の資料の表紙には「御記録方」とあります。先の『福井藩史事典』は「御目付の管理のもとに立つ者」として「上水奉行一名・徒目付十四人・記録方一人」などを挙げていることから、「御記録方」はこの御目付の管理下にある「記録方」を指すと考えられますので、これらの資料が目付の所管によって作成管理された人事関係資料と位置づけることができます。

三、もうひとつの士分の記録

「剝札」と「士族」は、一般職と専門職を含む士分のみ的人事記録です。この点では「(士族略履歴)」などと内容が部分的に重複する資料です。「剝札」は美濃判で二分冊、「士族」は半紙判で七分冊(内一冊欠本)です。「剝札」は士分各家について、最近の引退当主まで、歴代当主の履歴を記録しています。各家は、いろは別にまとめられ、そのなかで禄高順に配列されて、同姓

複数の場合に限って最高禄高の家に続けて記載されています。一方「士族」には、現役当主のみの履歴が、いろは別にまとめられ、禄高順に記載されています。

「剝札」の最大の特徴は、履歴の記載された短冊型の紙片を貼り付けて整理している点で、おおよそ明和・安永期頃までの短冊は美濃判の原簿から、それ以降は半紙判の原簿から剥ぎ取られたことがわかります。「剝札」の表紙には「嘉永四辛亥歳ヨリ改正」とありますから、この時、古い美濃判の原簿とそれに続く新しい半紙判の原簿があったことが想像されます。さらにおおよそ元治期以降の記録は、半紙判の原簿を切り取って貼り付けているのが確認されます。このことは「士族」が、おおよそ元治期までは半紙判の短冊、それ以降は直接記載となっているのに対応しています。つまり「士族」搭載の当主が現役引退すると、短冊部分は剥ぎ取られ、直接記載の部分は切り取られて「剝札」にあらたに貼り足されたことが容易に想像できます。このことから、「剝札」と「士族」は、内容が連続する資料であることがわかります。

このことを「い」にまとめられている「剝札」七二家と、「士族」六八家について確認すると、うち六一家が接続し、「剝札」の残り一一家は降格二家、改名六家、その他三家となり、また「士族」の残り七家は元武生の家臣二家、新規召出四家、改名一家となります。このことから、「剝札」と「士族」の内容は、接続すべき家はすべて連続していることがわかります。

このように、ひとつの資料とみなすことができる「剝札」「士族」を、内容のよく似ている「(士族略履歴)」と比較してみると、記録の下限が明治五年と長く、内容も豊富であり、医師・絵師などの専門職も含んでいることなど、利用価値が高いことがわかります。このことが、「剝札」と「士族」を連結して『福井藩士履歴』とし、翻刻、刊行することにした理由です。その際、各家は「剝札」の記載順とし、利用の便を考慮して、五十音順に組み替えました。

ところで「士族」は第三冊の「かよたれそ」が欠落しています。これを補うべき「(士族略履歴)」も第六冊の「よたれそ」が欠けています。このため「か」は「(士族略履歴)」で補い、「よたれそ」

は内容が似ている明治元年の八九八「藩制役成」を利用する予定です。同書は福井藩士分九六五名の履歴付き職員録で、すでに『福井市史 資料編5』に収載されていますので、詳細はその解題を参照してください。

おわりに

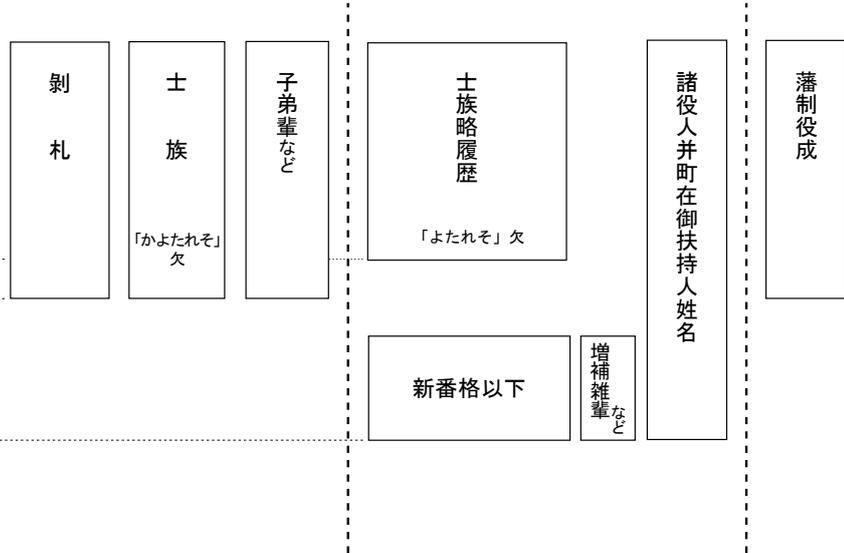
「剝札」「士族」の筆耕原稿は大学ノート四九冊（剝札二八冊・士族二一冊）にのぼり、すべて田原健子氏のボランティア活動によりました。氏は引き続き「（士族略履歴）」四五冊、「新番格以下」二八冊、「子弟輩」五冊、「御医師」「御茶道」など一一冊と、合計で大学ノート一三八冊の筆耕をすでに終えられ、なお精力的に活動を続けておられます。遠からずして、資料群全体の筆耕を完了されることでしょう。今回の「剝札」「士族」すなわち『福井藩士履歴』でも六分冊で、発刊完了に最短でも六年を要することを考えますと、これ以上の翻刻、発刊計画の延長拡大は望めない現状にありますが、何らかの形で、この膨大な情報の共有化が図られることを願って止みません。

参考資料

各資料と家格などとの関係

福井藩家臣団の家格別人数
(嘉永5年)

家 格	人 数
本多家	1
高知席	16
高 家	2
寄合席	38
定座番外席	14
番士 (役番外)	106
番士 (大番など)	495
新番・新番格	81
医師・絵師など	49
士分合計	802
与力	39
小役人	84
一統目見席	87
小算・坊主・下代	347
諸組(足軽)	1,341
卒合計	1,898
家臣団総計	2,700

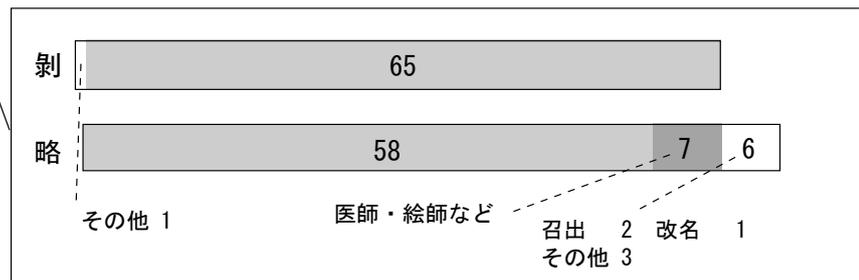
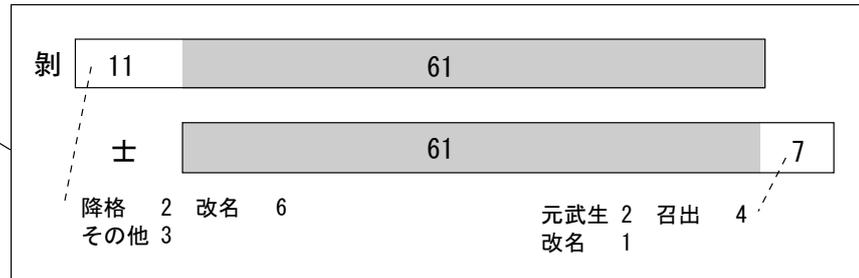


・荒子・中間等の小者973人を除く
 ・舟沢茂樹氏「福井藩家臣団と藩士の昇進」
 『福井県地域史研究』創刊号 1970年による

剥札と士族・士族略履歴との連繋 (い・かを例に)

資料別家数・人数

	剥	士	略	藩
あ	46	47	41	51
い	72	68	62	69
う	13	14	11	14
え	8	7	6	7
お	67	77	67	77
か	66	欠	64	73
き	13	9	7	14
く	21	25	18	27
け	2	2	2	3
こ	21	22	20	28
さ	46	45	41	48
し	19	18	18	20
す	23	26	26	28
せ	10	10	7	9
そ	1	欠	欠	2
た	68	欠	欠	70
ち	2	2	6	2
つ	25	23	17	25
て	2	3	3	3
と	14	19	11	15
な	50	52	41	55
に	17	15	15	16
ね	1	1	1	2
の	12	11	10	11
は	40	46	37	44
ひ	26	23	20	17
ふ	10	9	9	11
ほ	24	26	22	34
ま	36	43	32	42
み	29	36	23	27
む	9	10	7	12
め	1	1	1	1
も	8	7	5	8
や	43	50	41	53
ゆ	2	1	2	2
よ	22	欠	欠	29
わ	10	15	8	11



- ・「剥札」「士族」は一連の資料で、幕末維新期の福井藩家臣団(士分以上)の人事記録としてはもっとも充実している。
- ・「士族」の第3冊(かよたれそ)が欠本、「(士族略履歴)」「藩制役成」で補完が必要。
- ・「剥札」と「士族」「(士族略履歴)」は、ほぼ連繋する。「剥札」では改名や卒への降格、「士族」「(士族略履歴)」では子弟の新規召出(戊辰戦争など)、武生家臣などの新規繰入(明治3年2月)などが不連繋の原因。
- ・資料別家数・人数の「あ」～「え」は確定値。「お」以下は筆耕原稿などによる概数。

福井藩士履歴 1 あゝえ

福井県文書館資料叢書 9

平成二十五年二月二十三日 発行

編集発行 福井県文書館

九一八―八二一三

福井県福井市下馬町五二―一一

電話〇七七六―三三三―八八九〇

印刷 創文堂印刷株式会社

九一八―八二一三

福井県福井市問屋町一―七

電話〇七七六―二二一―三三三(代)

